

西はりま人間学セミナー

(令和三年六月九日)

小林 信三 先生の言葉に学ぶ



晩年の頃の講演会

「人生二度なし」

これ人生における最大最深の真理なり。

いかに深く生きるか

人生というものは限りあるものであり、しかもそれは、二度と繰り返すことのできないものです。してみると、そこに許された人生の真の生き方というものは、この限られた年限を、いかに深く生きるかということの外ないわけです。

〔361〕

人生の深さを知る

人生を生きることの深さは、実は人生を知ることの深さであり、人生を内面的に洞察することの深さと申してもよいでしょう。

〔362〕

求道とは、この二度とない人生を如何に生きるかという根本問題と取り組んで、つねにその回答を希求する人生态度と云ってよい。

すべて人間には、天から授けられた受けもち(分)がある。随ってもしこの一事に徹したら、人間には本来優劣の言えないことが分る。

逆境は 神の恩寵的試練なり。

いかに痛苦な人生であろうとも、「生」を与えられたということほど大なる恩恵はこの地上にはない。そしてこの点をハッキリと知らずのが、真の宗教というものであろう。

親鸞は「歎異抄」の冒頭において、「弥陀の誓願不思議に助けられまゐらせて」という。その不思議さを、親鸞と共に驚きうる人が、今日果して如何ほどあるといえるであろうか。

生への感謝

誠に至る道

現代の人々は、自分が人身を与えられたことに對して、深い感謝の念を持つ人は少ない。なほだ少ないようでありませぬ。仏教には「人身うけがたし」というような言葉が昔から行われているのです。つまり昔の人は、自分が人間として生をこの世にうけたことに對して、衷心から感謝したものであります。

〔21〕

誠に至るのは、何よりもまず自分の仕事に全力を挙げて打ちこむということ。すなわち全身心を捧げて、それに投入する以外にはないでしょう。かくして誠とは、畢竟するに「己れを尽くす」という一事に極まるとも言えるわけです。すなわち後にすこしの余力も残さず、ひたすらに自己の一切を投げ出すということでしょう。

〔22〕

人となる道を明らかにする

人間の本懐

職業とは、人間各自がその「生」を支えると共に、さらにこの地上に生を享けたことの意義を実現するために不可避の道である。されば職業即天職觀に、人々はもつと徹すべきであらう。

われわれは、一体何のために学問修養をすることが必要かというに、これを一口で言えば、結局は「人となる道」、すなわち人間になる道を明らかにするためであり、さらに具体的に言えば、「日本国民としての道」を明らかに把握するためだとも言えましよう。またこれを自分という側から申せば、自分が天からうけた本性を、十分に実現する途を見出すためだとも言えましよう。

〔23〕

われわれの学問の目的は、「国家のため」だけでなく真にお役に立つ人間になれるか」ということです。どれほど深く、またどれほど永く——。人間も自分の肉体の死後、なお多少でも国家のお役に立つことができたら、まずは人間と生まれてきた本懐というものでしょう。

〔24〕

教育とは人生の生き方のタネ蒔きをすることなり。

教育とは流水に文字を書くような果ない業である。
だがそれを巖壁に刻むような真剣さで取り組まねばならぬ。

真の教育は、何よりも先ず教師自身が、自らの「心願」を立てることから始まる。

人間は一生のうち逢うべき人には必ず逢える。

しかも一瞬早過ぎず、一瞬遅すぎない時に。

人はすべからく終生の師をもつべし。

真に卓越せる師をもつ人は終生道を求めて歩きつづける。

その状あたかも北斗星を望んで航行する船の如し。

天下第一等の師につきてこそ

人間も真に生甲斐ありというべし。

一眼は遠く歴史の彼方を、
そして一眼は脚下の実践へ。

師は居ながらにして与えられるものではない。

「求めよ、されば与へられん」というキリストの言葉は、この場合最深の眞理性をもつ。

じづけの三大原則

一、朝のあいさつをする子に。それには先ず親の方からささいな水を出す。

二、「ハイ」とはつきり返事のできる子に。それには母親が、主人と呼ばれたら必ず「ハイ」と返事すること。

三、席を立つたら必ずイスを入れ、ハキモノを脱いだら必ずそろえる子に。

「日不読」「食不喰」

書物は人間の心の養分。読書は一面からは心の奥の院であると共に、また実践へのスタートラインでもある。

読書は心の食物

読書が、われわれの人生に対する意義は、一口で言つたら結局、「心の食物」という言葉がもっともよく当たると思うのです。

[61]

眞理は現実の只中であつて書物の中にはない。書物は眞理への索引ないしはしおりに過ぎない。

人間の幅は読書で決まる

いやしくも自分の前途を展望して、将来ひとかどの人物になつて活躍しようと思ふなら、今日から遠大な志を立てて、大いに書物を読まねばならぬでしょう。それというのも、一人の人間の持つ世界の広さ深さは、要するにその人の読書の広さと深さに比例するとも言つてもよいからです。

[107]

学問修養には気魄を要す

古人は学と言へば、必ず聖人たらんことを志したものです。しからは今日われわれ日本人として、いやしくも学問修養に志す以上、われわれのもつ偉大な先人の踏まれた足跡を、自分も一歩なりとも踏もうと努め、たとえ一足でも、それににじり寄り寄ろうとする気魄がなくてはならぬと思うのです。

[116]

一日読書をしなければ

読書はわれわれ人間にとつては心の養分ですから、一日読書を廃したら、それだけ眞の自己はへたばるものと思わねばなりません。

[65]

書物を撫でる

諸君、書物というものは、ただ撫でるだけでもよいのです。ちよつとでも開いて見ればさらによろしい。それだけでも功德のあるものです。つまりそれだけその本に縁ができるからです。いわんや一ページでも読んだとしたら、それだけ楔を打ち込んだというわけです。

[137]

眞の修養

眞の修養というものは、単に本を読んだだけでできるものではなくて、書物で読んだところを、わが身に実行して初めて眞の修養となるのです。それゆゑ書物さえ読まないようでは、まったく一歩も踏み出さないのと同じで、それでは全然問題にならないのです。

[138]

精神の死

人間も、読書をしなくなつたら、それは死に瀕した病人が、もはや食欲がなくなつたと同じで、なるほど肉体は生きていても、精神はすでに死んでいる証拠です。ところが人々の多くは、この点が分からないようです。

[139]

つねに腰骨をシャンと立てること——
これ人間に性根の入る極秘伝なり。

「腰骨を立てる」ことは、エネルギーの不尽の源泉を貯えることである。

この一事をわが子にしつけ得たら、親としてわが子への最大の贈り物といってよい。

挙手は、行動的な「しつけ」の第一であって、断乎たる決意の表明ともなる。挙手についてはまず①五本の指をそろえ、②ついで垂直に上げること③そして最後に俊敏に!!—という三つが大事。

手紙の返事はその場で片づけるが賢明。
丁寧にと考えて遅れるより、むしろ拙速を可とせむ。

なつた一枚のバガギで、しかもたった一言のコトバで、人を慰めたり励ましたり出来るどしたら、世にこれほど意義あることは少ないであろう。

- 一、袖を直し
- 二、場を清め
- 三、時を守り

これ現実界における再建の三犬原理はして、いかなる時・処にも当てはまるべし。

人に長たる者は、孤独寂寥に耐えねばならぬ。

三ツのことは

「人を先にして己れを後にせよ」

「敵に勝たんと欲するものはまず己れに克て」

「義務を先にして娯楽を後にせよ」

下坐を行ずる①

下坐行とは、自分を人よりも一段と低い位置に身を置くことです。言い換えれば、その人の真の値打よりも、二、三段下がった位置に身を置いて、しかもそれが「行」と言われる以上、いわゆる落伍者というのではなくて、その地位に安んじて、わが身の修養に励むことを言うのです。そしてそれによつて、自分の傲慢心が打ち砕かれるわけです。すなわち、身はその人の実力以下の地位にありながら、これに対して不平不満の色を人に示さず、真面目にその仕事に精励する態度を言うわけです。〔47〕

下坐を行ずる②

世間がその人の真価を認めず、よつてその位置がその人の真価よりはるかに低くても、それをもって、かえつて自己を磨く最適の場所と心得て、不平不満の色を人に示さず、わが仕事に精進するのであります。これを「下坐を行ずる」というわけです。〔47〕

人は退職後の生き方こそ、その人の真価だといってよい。
退職後は、在職中の三倍ないし五倍の緊張をもつて、晩年の人生と取り組まねばならぬ。

後半生を何に捧げるか

六十以後が勝負

人間は自分の後半生を、どこに向かつて捧ぐべきかという問題を、改めて深く考え直さねばならぬ。その意味において私は、もう一度深く先人の足跡に顧みて、その偉大な魂の前に首を垂れなければならぬ、と考えるようになった。〔362〕

人間というものは、自分のかつての日の同級生なんか、どんな立派な地位にところが少しもあわてず、悠々として、六十以後になつてから、後悔しないような道を歩む心構えが大切です。知事だの大学教授だのと言つてみたく、六十を過ぎる頃になれば、多くはこれ恩給取りのご隠居さんにすぎません。〔49〕

木村信三先生

一日一語

寺田清一編

〔不刊叢書 第一集〕

修身教授録 一日一言

修身教授録

森信三著

(同右)

藤尾秀昭編

(致知出版社刊)

幻の講話 第一巻く第五巻 (実践人の家刊)

森信三

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

森 信三（もりのぶぞう、1896年（明治29年）9月23日 - 1992年（平成4年）11月21日）は、日本の哲学者・教育者。通称、しんぞう。

愛知県知多郡武豊町に父・端山（はしやま）俊太郎、母・はつの三男として生まれる。2歳で岩滑（やなべ、現：半田市）の森家に養子に出され、以来森姓となる。

1920年（大正9年）広島高等師範学校英語科に入学、福島政雄・西晋一郎に学ぶ。1923年（大正12年）、京都帝国大学文学部哲学科に入学し、主任教授西田幾多郎の教えを受け、卒業後は同大学大学院に籍を置きつつ天王寺師範学校（現：大阪教育大学）の専攻科講師となる。1939年（昭和14年）に旧満州の建国大学に赴任するが、敗戦後の1946年（昭和21年）に帰国、1947年（昭和22年）個人雑誌「開頭」を創刊、1953年（昭和28年）、神戸大学教育学部教授に就任。同大学退官後の1965年（昭和40年）には神戸海星女子学院大学教授に就任。1975年（昭和50年）「実践人の家」建設。1992年（平成4年）逝去。主な著書に『修身教授録』『哲学叙説』『恩の形而上学』などがある。ちなみに「信三」は戸籍上は「のぶぞう」と読み、「しんぞう」は戦後帰国した際に他人が読みやすいという理由から名乗った通称である。

半田市名誉市民^[1]。半田市がつくった新美南吉記念館の一室に森信三記念室が設けられていたが、平成25年4月から半田市立博物館に新設された郷土の文化人コーナーで紹介されている。

- 森信三全集 全25巻 実践社 1965年～1968年
- 森信三選集 全8巻 実践社 1968年
- 森信三著作集 全10巻 実践社 1971年
- 森信三全集続編 全8巻 実践社 1983年
- 森信三講演集 全2巻 実践社 1987年

人間いかに生きるべきか。「全一学」を基盤とした「立腰人間学」の実践。

実践人

森 信三・創刊

（昭和31年（1956）4月号から発刊）